

カナダのU B Cで3校が調印



長身で、痩せて、精悍な風貌のDr. G. S.ビーグリー。カナダのプリティッシュ・コロンビア大学(UBC)の歯学部長である。あとで知ったのだが、国際歯科研究学会(IADR)と国際歯科連盟(FDI)の両会長をつとめた唯一の人物であった。その風格から、“ライオン”と渾名されていた。

1987年(昭和62年)、シカゴでのIADRの途中、私、古屋英毅教授、小倉英夫教授は、UBC歯学部の創立25周年に当たる6月20日、バンクーバーを訪れた。私たちは、姉妹校ミシガン大学のR. C. クリスチャンセン歯学部長を誘って、3校のトライアングルの姉妹校提携を計画した。

私は46歳だったが、彼らには30歳足らずに見えたらう。そんな東洋の若僧をDr. ビーグリーは、快くにこやかに迎えてくれた。厳顔ながら、口数少ないシャイな紳士であった。若いD. ブルーネット教授(平成22年に本学の名誉博士)が、秘書役として彼に尽くしていた。

午前10時半、眼下にイングリッシュ湾を望むUBC迎賓館の潇洒なゲストルーム。D. W. ストラングウェイ学長夫妻の温かい出迎えをうけて、3校関係者が勢揃いした。

私は窓越しに美しい水面をみて、「湖ですか?」と問うた。するとストラングウェイ学長が目を丸くして、「太平洋ですよ!」とおどけてみせて、一同大笑いになった。当時はまだ環太平洋という時代ではなかったが、彼は私に、太平洋をはさんだ両国・両校の交流の意義を強調したのだ。

3校の歯学部長が、おのこの姉妹校調印書に署名し、シャンペンで乾杯した。つづいて、学長主催の午餐会が催された。海外出張の時刻が迫るのに、学長夫妻は、閉宴のあと私たちを玄関まで見送ってくださった。

(写真・テーブルで署名する私、左側に手をひろげるビーグリー歯学部長、右側に微笑むクリスチャンセン歯学部長)